

ジェンダーと 言語文化

Topic
01

ジェンダー言語文化学プロジェクトについて

「ジェンダー言語文化学プロジェクト」は、日・中・英・米・独・仏の各言語と文学に関する、ジェンダーの視点をを用いた研究の促進と、その内容を反映させた授業プログラムの提供を目的としています。言語文化学科が推進する本プロジェクトは、文学部が特に力を入れている研究・教育の取り組みのひとつで、プロジェクトの活動は、大きく分けて、シンポジウムや講演会などの企画・実施を行う研究促進と、授業を中心とした教育という二本の柱で成り立っています。

Topic
02

ジェンダー言語文化学プロジェクト講演会

「モードとジェンダー」

— 19世紀フランス文学を
服装やモードを通して読み解く —

日時：令和6年12月10日（火）13：00～14：30

講演：村田 京子 氏（大阪府立大学名誉教授）

共催：奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学
研究センター



今年度は『イメージで読み解くフランス文学』（水声社、2019）、『モードで読み解くフランス文学』（同、2023）などの著作を刊行されている村田京子氏（大阪府立大学名誉教授）に、19世紀フランス文学におけるモードとジェンダーの関係について講演していただきました。

フランス文学の小説の歴史を振り返ってみると、登場人物たちの装いが事細かに描写されるようになったのは19世紀になってから、たとえばバルザックのような写実主義的な作家が、社会の様子を徹底的に描こうと試みるようになってからのことです。服装を詳細に描こうとする姿勢は、19世紀後半になってゾラなどの自然主義作家が活躍するようになると、さらに顕著になります。村田氏はゾラ作品のなかでも、とくに第二帝政期のパリ改造事業計画を背景として書かれた『獲物の分け前』を、モードとジェンダーの観点から詳細に分析されました。

小説の主人公は、改造事業下にあって土地投機バブルに沸くパリで大金を得た事業家サカールの妻ルネ。彼女は夫の注ぎ込む財によって、誰も及ばぬほどの豪華な衣装を身に着け、パリ社交界に「モードの女王」として君臨します。

しかしその豪華さはあくまでも外見に限られており、中身は空疎な状態であることから、彼女は「パリ人形」のような存在なのだ、との指摘がなされました。また、ルネの存在は、彼女の周りに個性的な身体を持つ娼婦シルヴィアや、シンプルな装いの妹クリスティーンが配置されることによって、その空疎さが際立つ仕掛けになっているといえます。

ドレスの注文者でありながら、「天才仕立て屋」と名高いウォルムスの言いなりにならざるを得ないルネは、主体性を発揮することはなく、結局は夫や義理の息子の欲望を満たす「操り人形」にすぎません。女性は一見したところ、モードの主導者であるように見えますが、実際には「『視線の主体』ではなく『男性の視線』を先取り」しているだけであり、その主体性のなさ、ルネが根本的に持っている「自己放棄」の態度は連関しているのではないかと、という村田氏の指摘は、とても重要だと思われまます。

講演会場には70名を超える参加者が集まり、熱心に講演を聞きました。講演後の質疑応答も活発で、日本の宮中衣装との比較など、興味深い論点が提示されました。講演後のオンデマンド視聴者を含めると、90名以上の参加者を得て熱気にあふれる講演会になりました。

参加学生の声

「一人の女性の外見、行動や生活の枠組が彼女の夫や愛人の社会的・経済的威光のバロメーターの代わりとなっていた」ということに最も関心を持った。

なぜなら、家父長制において女性は男性の所有物であるということが分かりやすく示されていたからだ。女性の外見の枠組みとしてモードに注目して学ぶのはとても興味深かった。

男性は女性に「身体活動はすべて禁じられ」る服を着させることで自由を制限し、女性に働かせる必要のない経済的余裕があることを示していることが分かった。

(文学部2回生)

「白」という色が、『獲物の分け前』のルネに関しては、贅沢さなどを表し「どきついまでの白さ」という表現もされているのが面白いと感じました。

講演の中でも言及されていた通り、「白」は伝統的に「純潔」「貞淑」などを表し、『獲物の分け前』の中でも、妹の身に付ける「白」はそのような伝統的な意味を象徴するように描かれているのに対して、「白」が対照的に使用されているのが興味深かったです。

また、登場人物の「身なり」「服装」「恰好」「姿」など、日本語で色々な言い方がありますが、今回のように服装(モード)に着目して作品を読むと、服装というよりむしろ「衣装」という言い方がともしっくりくると感じました。

(文学部3回生Y.O.)

Topic
03

令和6年度プロジェクト関連授業

学ぶことと女性のライフスタイル (担当：野村鮎子ほか)

文学部1回生を対象に開講している授業です。前半の「講義」部分と後半の「ミニゼミ」部分から成り立っています。「ミニゼミ」では受講学生が14のグループに分かれ、それぞれが設定したテーマで討論を行い、その結果を発表しました。

ジェンダー言語文化学概論 (担当：高岡尚子)

2回生以上の学生を対象とするこの授業では、「ジェンダーの非対称性」「セクシュアリティ」「性自認」「家族」「結婚」「暴力」「インターセクショナルリティ」「ケア」などのテーマとジェンダーのかかわりを論じつつ、同時に、文学作品に描かれたそれぞれの問題について考察しました。

ジェンダー言語文化学演習 (担当：高岡尚子)

概論を受け継ぐこの授業では、理論についての理解を深めるため、「ジェンダー批評」や「フェミニズム批評」、「クィア理論」についての解説を行った後、実際に、ジェンダーの視点から歌詞や文学作品の分析に挑みます。今年度は『美女と野獣』と『殺人出産』(村田紗耶香)を扱いました。

ジェンダー言語文化学特殊研究A

(担当：ヨーロッパ・アメリカ言語文化学コース)

専門分野の異なる複数の教員が、ジェンダーとことばや文学に関する授業を行います。今年度は「フランスのフェミニズムとジョルジュ・サンドという現象」(高岡尚子)、「アメリカ文学の伝統とフェミニスト批評」(中川千帆)、「ことばとジェンダー」(須賀あゆみ)、「それでも書いた女性たち」(児玉麻美)というラインナップでした。

ジェンダー言語文化学特殊研究B

(担当：日本・アジア言語文化学コース)

今年度は「中国や台湾におけるフェミニズム/ジェンダーの展開」(野村鮎子)というタイトルで講義を行いました。近代以降の第1波フェミニズムや第2派フェミニズム、およびジェンダー、セクシュアリティという概念がどのように中国や台湾に伝播し、それが社会や文化、文学にどのような影響を及ぼしたのかについて検討しました。

プロジェクト・令和7年度のとりくみ

本プロジェクトでは、これからも、ジェンダーをテーマに、人間のあり方を深く問いかける試みを続けるとともに、授業の充実をはかります。内容は毎年変わりますので、令和7年度の開講科目についてはwebシラバスを参照してください。

奈良女子大学文学部 言語文化学科
「ジェンダー言語文化学プロジェクト」
プロジェクト担当・編集責任：高岡 尚子
naotakaoka@cc.nara-wu.ac.jp